Aydin Hamami

アーティスト・ステートメント

アーティストとして私は、手仕事への関心が薄れつつある現代において、芸術制作における「儚さ」の役割に向き合っています。機械学習やAIによる自動化によって生み出されるものに、社会がますます依存するようになるなか、芸術の領域においては、個人的で親密なものが持つ真正性の重要性が高まっています。私の作品は、こうした必要性に応えようとするものであり、消費主義的な価値観を超えた人間同士の対話を促し、儚い存在である私たち自身の本質と向き合いながら、世界と身体を通じて関わることへの関心を再び呼び覚ますことを目指しています。

私は、自らの時間性を映し出すようなものに惹かれます。ひびの入った器、着古されたコート、長い年月をかけて愛着が育まれた家。私の制作プロセスは、記憶や時間、そして手で触れることのできるものについての瞑想でもあります。絵画の基底を成す廃棄された素材に、長く連なる縫い目を施していくとき、祖母が同じように針を進めていた手の姿が思い浮かびます。濃いお茶とコロンの香り、そして、ほとんど理解できそうでいて、完全には理解できない言葉。その記憶がよみがえります。記憶は私たちの現実を形づくる一方で、私たち自身がいかに移ろいやすい存在であるかを映し出すものでもあります。

本シリーズの作品は、ミクストメディアによる抽象絵画とアッサンブラージュを通して、素材、触れること、親密さ、そして記憶を探求するものです。メディアの世界がますます洗練され、作為的で人工的なものへと傾いていくなかで、私たちはしばしば、本物であること、触れることのできるもの、人の手によって生み出されたものを求めるようになります。
これらの絵画は、日常生活のあらゆる場面に浸透している過剰なまでの言語化や明確化に対する応答でもあります。人の手で繕われたパッチワークがもたらす親密さ、身体的な行為によって偶然生まれる痕跡、そして、かつてはひとつの目的のために使われていたものが、時間の経過や放置による変化を経て、新たな文脈のもとで、物語を宿した新しい存在へと生まれ変わる過程に焦点を当てています。